

三和教田遺跡D地点

2000年

日田市教育委員会

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が日ノ出エステートからの委託を受け、平成10年度に発掘調査を実施した三和教田遺跡D地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘現場での遺構の実測は土居・森山、遺構写真は土居が行った。
3. 本書に使用した遺物の実測は土居、遺構・遺物の製図は土居のほか財津香奈子氏の協力を得た。
4. また、遺物写真は文化財写真家長谷川正美氏に撮影いただいた。
5. なお、出土遺物や図面類については、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
6. 本書の執筆・編集は土居が行った。

本文目次

I 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の内容	4
IV まとめ	9

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図 調査地点周辺の地形図 (1/2,500)	4
第3図 遺構配置図 (1/100)	5
第4図 1号竪穴住居跡実測図 (1/30)	6
第5図 1号土壇実測図 (1/30)	7
第6図 出土土器実測図 (1/3)	7
第7図 出土石器実測図 (1/2)	8

図 版 目 次

図版1 調査作業風景／完掘状況／1号竪穴住居跡
図版2 出土遺物（土器）
図版3 出土遺物（石器）

I 調査の経過

(1) 調査に至る経過

平成10年9月10日付けで日ノ出エステート代表者森山静枝氏より、日田市大字三和字鮎町960-1ほか3筆におけるしみずニュータウン建設工事に伴う埋蔵文化財所在の有無の照会文書が市教育委員会に提出された。

これを受けた市教育委員会では、当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である三和教田遺跡に該当し、すでに平成6年度には隣接地のB地点で発掘調査を実施していることから、遺跡が存在する旨を開発者に回答するとともに、その後両者間においてその取り扱いについて協議を行った。

その結果、事業予定地の大半は盛土工事であったが、B地点において弥生時代や古代の重要な遺構が確認されている経過もあることから、遺跡の内容確認をも踏まえた工事予定地域の全面を対象とした調査を行うことで協力を得ることが出来た。

平成10年11月6日には日ノ出エステート代表者森山静枝氏による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、平成10年12月2日付け教委文第6117号大分県教育委員会教育長名にて発掘調査実施の通知が出された。

この後、市教育委員会と開発者は発掘調査の期間や経費などについての打ち合わせを重ね、最終的には日ノ出エステート代表者森山静枝氏の委託事業として市教育委員会が発掘調査を受託することで協議はまとまり、調査に関する協議書および契約書を交わし、12月12日より本格的な現場作業を行うこととなった。

なお、発掘調査は事業造成予定面積 2,019㎡のうち、削平を受けた箇所を除く約560㎡を調査対象とし、平成10年度に発掘作業、平成11年度に整理作業、平成12年度に報告書の発行とした。

(2) 調査日誌

12月12日／機械を使って表土のはぎ取りを行う。

12月15日／この日より、作業員による遺構検出を始める。

12月20日／遺構の掘り下げを開始する。

12月21日／遺構の写真撮影を行う。

12月23日／遺構の実測を行い、器材を撤収し、調査を終了する。

(3) 調査組織

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育長）

調査事務 原田俊隆（文化課長）・長尾幸夫（文化課課長補佐兼文化財係長）～平成10年3月31日
石井英信（同課長補佐兼文化財係長）平成11年4月1日～・佐々木豊文（文化課主任）

調査員 土居和幸（文化課主任）・森山敬一郎（文化課囑託）

調査作業員 秋吉タミエ・猪熊ヨネ・小下一・五反田静子・財津由太・島田隆幸・島田松之助・
清水忠造・園田義雄・高倉美利・高倉富美子・高村笑美子・津江久徳・手嶋トシエ・
吉弘昇

整理作業員 伊藤弘子・酒井貴代美・聖川暢子・和田ケイ子

II 遺跡の立地と環境

三和教田遺跡は、筑後川の支流である花月川中流域右岸の標高約110m前後の低丘陵上に位置している。この遺跡が所在する付近は日田盆地内の北部にあたり、花月川をさらに遡ると中津・宇佐へと通じる。遺跡の最も高い位置から南側を望むと、日田市街地が一望できる好所でもある。

遺跡周辺は現在三和・花月と呼ばれ、この地域一帯には尾坪、大坪、栗ヶ坪といった条里関連地名が多く残ることから、奈良時代の条里地割りの推定がなされている。中世期には遺跡から2km南の花月川右岸にある慈眼山を拠点とした郡司大蔵氏が日田の地を支配していた。中世末期になるとこの大蔵氏から大友氏へと支配体制は変わり、その実権は大蔵氏の一族朗徒8名による郡老に委ねられ、その一人である財津氏がこの地域を拠点としていた。

三和教田遺跡周辺の遺跡には、まず花月川を挟んだ台地上に葛原遺跡^{註1)}が存在する。これまでに4次の調査が実施され縄文時代後期、弥生時代前期から中期、古墳時代後期、中世の複合した集落跡が確認されている。この遺跡内には葛原古墳、遺跡南側斜面には縫ヶ迫古墳群などが点在している。

また、三和教田遺跡の背後にあたる山田原台地上には弥生時代中期から後期、奈良時代、中世期の集落や墓地が発掘された後迫遺跡^{註2)}がある。この遺跡に近接しては方格規矩鏡片が発見された草場第1遺跡や用松原・谷ノ久保遺跡などが立地しており、市内では大規模遺跡の一つに数えられる。

さらに、この台地縁辺部には用松中村古墳が、台地斜面には5世紀後半から8世紀の横穴墓が発掘された羽野横穴墓群^{註3)}が存在し、また花月川流域沿いの沖積地には古墳時代前期の竪穴住居跡や土坑などが調査された日田条里遺跡^{註4)}がある。

さて、三和教田遺跡ではこれまでに県・市教委による7次の発掘調査などが実施されている。A地点^{註5)}(1次)では弥生時代の土坑やピット、B地点^{註6)}(2次)では旧石器時代のナイフ形石器などの遺物、弥生時代後期中頃～後半の環濠や竪穴住居、掘立柱建物、古墳時代後期の溝や竪穴住居跡、掘立柱建物、中世期の建物などが調査され、とくに古墳時代後期の溝の埋土からは小型の円面硯が出土するなどこの遺跡での中心的な場所でもあると考えられている。

このほかC地点^{註7)}(3次)では縄文時代後期から晩期の流路や弥生時代中期初頭の土坑が確認され、当該期の多数の縄文土器や石器が出土しており、E地点^{註8)}(5次)では縄文時代後期から晩期の流路、G地点^{註9)}(7次)では古墳時代初めの流路が調査されている。

註1) 昭和61・62年度、平成元・6年度に市教育委員会が発掘調査を実施。

註2) 平成3～5年度に県教育委員会、平成10・11年度に市教育委員会が発掘調査を実施。

註3) 渋谷忠章他『日田市羽野横穴墓群発掘調査概報』大分県教育委員会 1985年

註4) 友岡信彦『日田条里遺跡群』『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6)』大分県教育委員会1997年

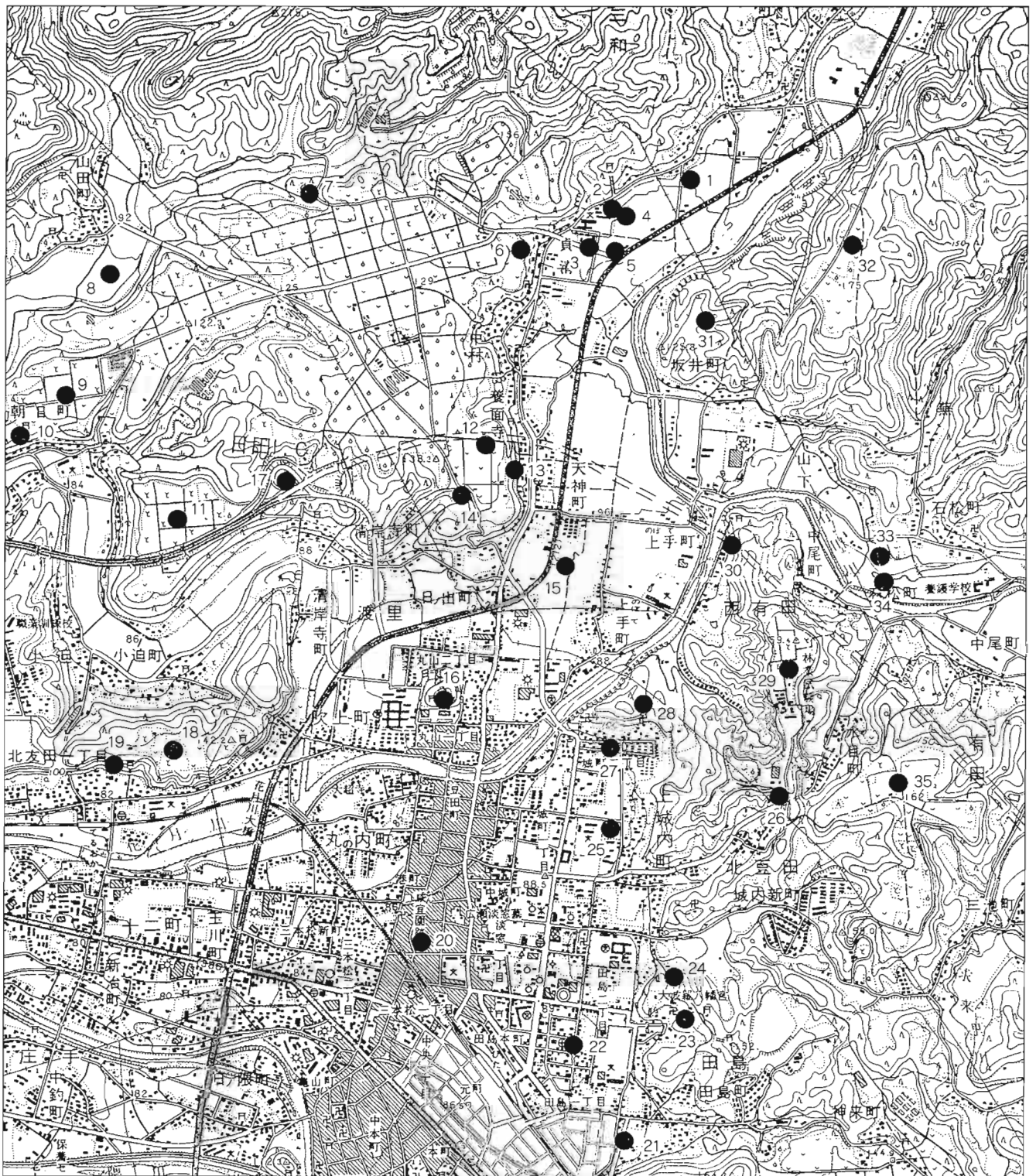
註5) 土居和幸編『三和教田遺跡』日田市教育委員会 1999年

註6) 土居和幸『三和教田遺跡B地点』『平成6年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997年

註7) 吉田博綱編『三和教田遺跡C地点』大分県教育委員会 1997年

註8) 若杉竜太『三和教田遺跡E地点』『平成10年度日田市埋蔵文化財年報』1999年

註9) 平成11年度に市教育委員会が発掘調査を実施。



- | | | | | |
|--------------|------------|-------------|--------------|------------|
| 1. 三和教田遺跡A地点 | 8. 岩崎遺跡 | 15. 日田糸里遺跡 | 22. 日田糸里飛矢地区 | 29. 佐寺原遺跡 |
| 2. 三和教田遺跡B地点 | 9. 朝日宮ノ原遺跡 | 16. 月隈横穴墓群 | 23. 粟師堂山古墳 | 30. 夕田横穴墓群 |
| 3. 三和教田遺跡C地点 | 10. 天満古墳群 | 17. 草場第一遺跡 | 24. 大波羅遺跡 | 31. 縫ヶ迫古墳群 |
| 4. 三和教田遺跡D地点 | 11. 小迫辻原遺跡 | 18. 吹上遺跡 | 25. 上ノ馬場遺跡 | 32. 葛原古墳 |
| 5. 三和教田遺跡E地点 | 12. 後迫遺跡 | 19. 北友田横穴墓群 | 26. 水目横穴墓群 | 33. 内ノ下遺跡 |
| 6. 用松原遺跡 | 13. 羽野横穴墓群 | 20. 史跡咸宜園跡 | 27. 慈眼山瀬戸口遺跡 | 34. 川原田遺跡 |
| 7. 谷ノ久保遺跡 | 14. 草場第二遺跡 | 21. 会所宮遺跡 | 28. 大蔵古城跡 | 35. 中尾原遺跡 |

第1図 遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

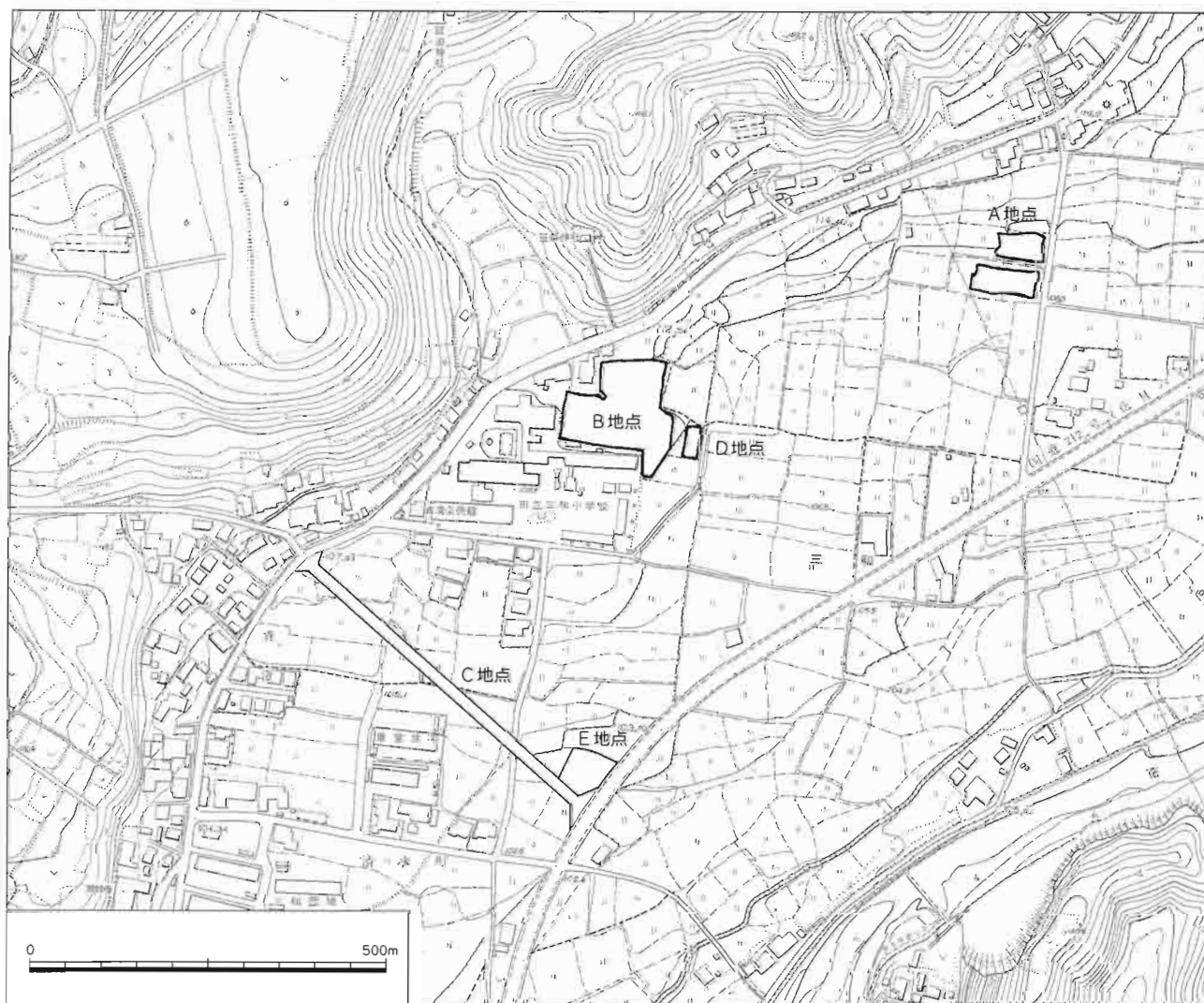
Ⅲ 調査の内容

(1) 調査の概要 (第2・3図)

今回の調査位置は、第2図に示すとおり平成6年度に発掘調査を行ったB地点のすぐ東側に隣接した場所にあたる。B地点では弥生時代から中世にいたる各時代の遺構が検出されており、その続きの関連した遺構の存在が想定された。そこで、対象地区の南側から機械を使って表土剥ぎを開始したが近世以後の水田開発による削平が著しく遺構は確認できず、D地点と呼ぶ対象地区北側において中世から近世頃の水田下から遺構が検出された。

調査区は現在の地形に沿うように西側から東側へと緩い傾斜をなしており、検出した遺構の地山は黄色の砂質土であった。調査で確認した遺構は竪穴住居跡1軒、土坑1基、柱穴多数であるが、その大半は第3図に見るように調査区の西側に集中するかのよう認められ、削平を受けているためほとんどの遺構の深さは浅く、全体的に遺構の残りは良くなかった。

以下、検出した遺構と調査区内から出土した一括遺物についてまとめる。



第2図 調査地点周辺の地形図 (1/2,500)

(2) 遺構と遺物

1号竪穴住居跡 (第4図、図版1)

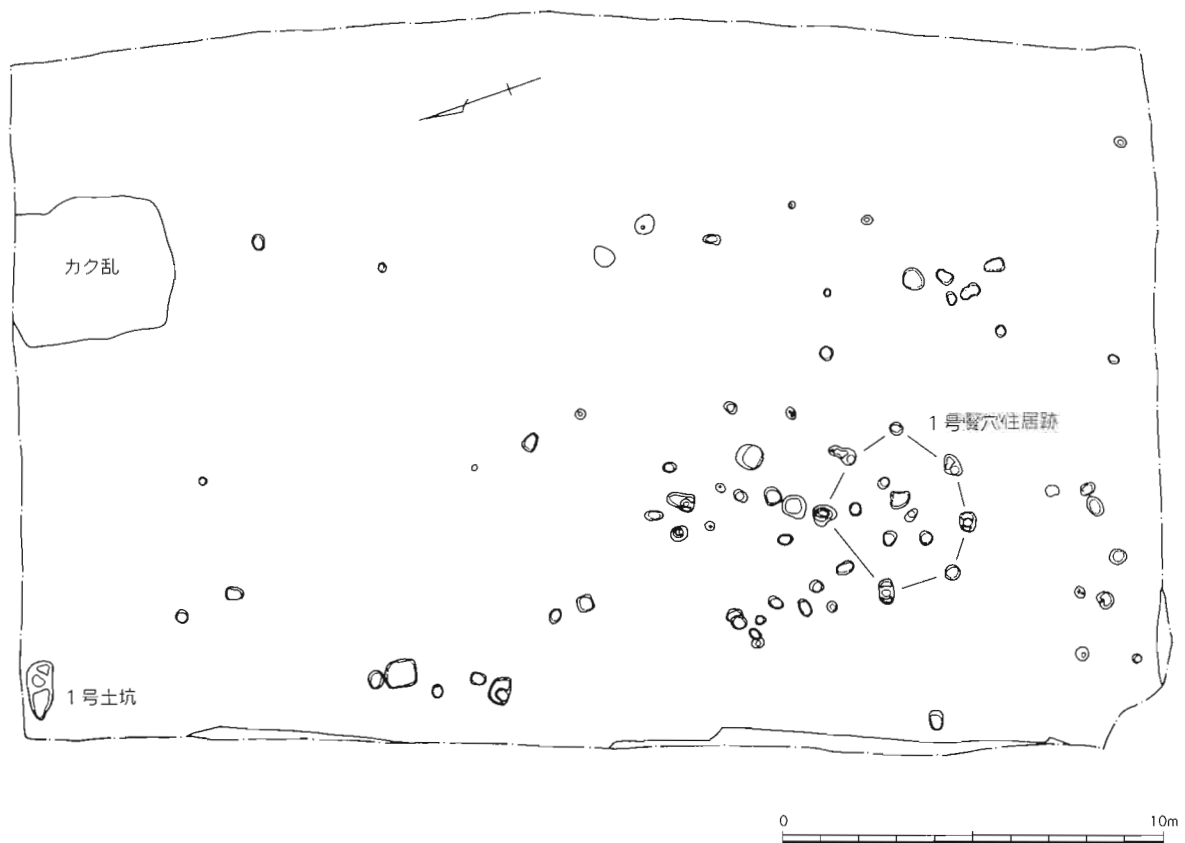
調査区の南西側で検出した竪穴住居跡で、壁面など大半は削平を受けているため柱穴しか残存していない。柱穴は7つあってほぼ円形に巡ることから、平面形態が円形プランをなす竪穴住居跡と考えた。これら7つの柱穴の中心にはいくつかの小ピットが存在しているが、焼土や炭あるいは遺物の出土が認められず炉跡と考えられる土坑は残っていないと判断した。また、この竪穴住居跡の規模はP1からP5までが心心距離で約3.9m、P3からP7までの心心距離が約4.3mあり、約6㎡前後の規模を有する竪穴住居跡であったと推定される。

柱穴からの出土遺物は、P5の柱穴から第7図2に示す二次加工剥片が出土している。二次加工剥片は両面のほぼ全周に丁寧な加工が施されている。石鏃の未製品の可能性もある。最大長3cm、現存幅2cm、最大厚5mmを測る。黒曜石製である。このほかの柱穴からは土器片が出土しているが、小片のため図示はしていない。

1号土坑 (第5・6図)

調査区の北西隅で検出した不定形な土坑である。東西方向に長く、そのほぼ中心はピット状に深くなっており、二段掘りをなしている。遺物の出土はほとんどない。その規模は長軸が1.2m、短軸が55cm、深さ28cmを測る。

第6図2は甕の口縁部である。口縁部は短く、「く」字状に外反する。色調は内外面とも暗茶色。胎土は角閃石、石英、長石を含む。



第3図 遺構配置図 (1/100)

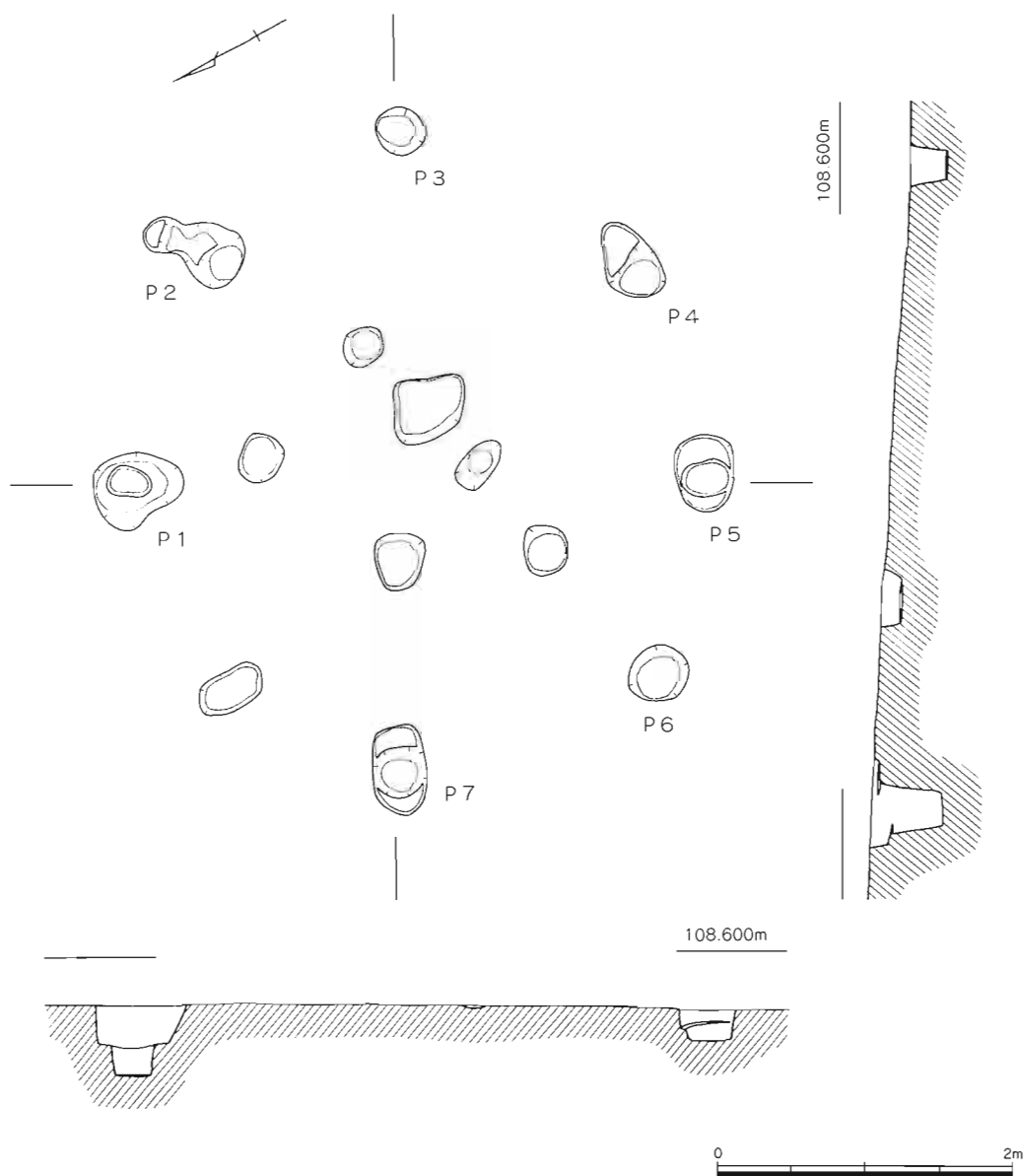
一括遺物（第7・8図、図版2・3）

次に示す遺物は、1号土坑出土の第6図2の土器と1号竪穴住居跡P5出土の第7図2の石器を除けば、表土中や遺構検出作業中に出土した遺物である。

土器（第7図、図版2）

1・3は甕である。1は口縁部で、逆し字状をなす。色調は外面が茶褐色、内面が明茶褐色。胎土は石英、角閃石、長石を含む。3も口縁部で、「く」字状に外反する。内面にハケが残る。色調は外面が茶褐色、内面が明茶褐色。胎土は石英、角閃石、長石を含む。復元口径は11.3cmを測る。

4～6は壺である。4は壺の胴部上半にあたり、頸部下に3本の突帯が巡っている。色調は内外面とも明褐色。胎土は石英、角閃石、長石、白色粒子を含む。5は袋状口縁壺の口縁部である。色調は外面が明茶褐色、内面が明褐色。胎土は石英、角閃石、長石を含む。磨耗が著しい。6は二重口縁壺



第4図 1号竪穴住居跡実測図（1/30）

の口縁部で、短く外反する。色調は内外面とも明褐色で、胎土は石英、角閃石、長石を含む。復元口径は26.4cmを測る。磨耗が著しい。

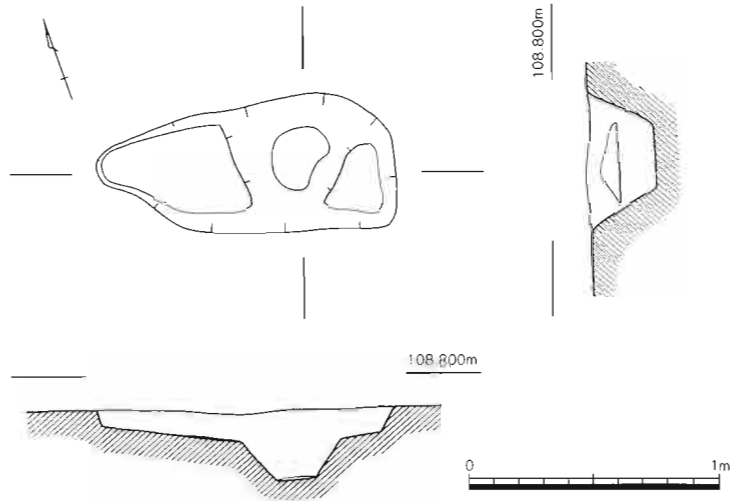
8は高坏で、口縁部は短く立ち上がる。色調は外面が暗茶褐色、内面が明茶褐色で、胎土は石英、角閃石、長石を含む。

9・10は脚部である。9は外面にハケが残る。色調は外面が明茶褐色、内面が明灰褐色で、胎土は石英、白色粒子、長石、雲母を含む。

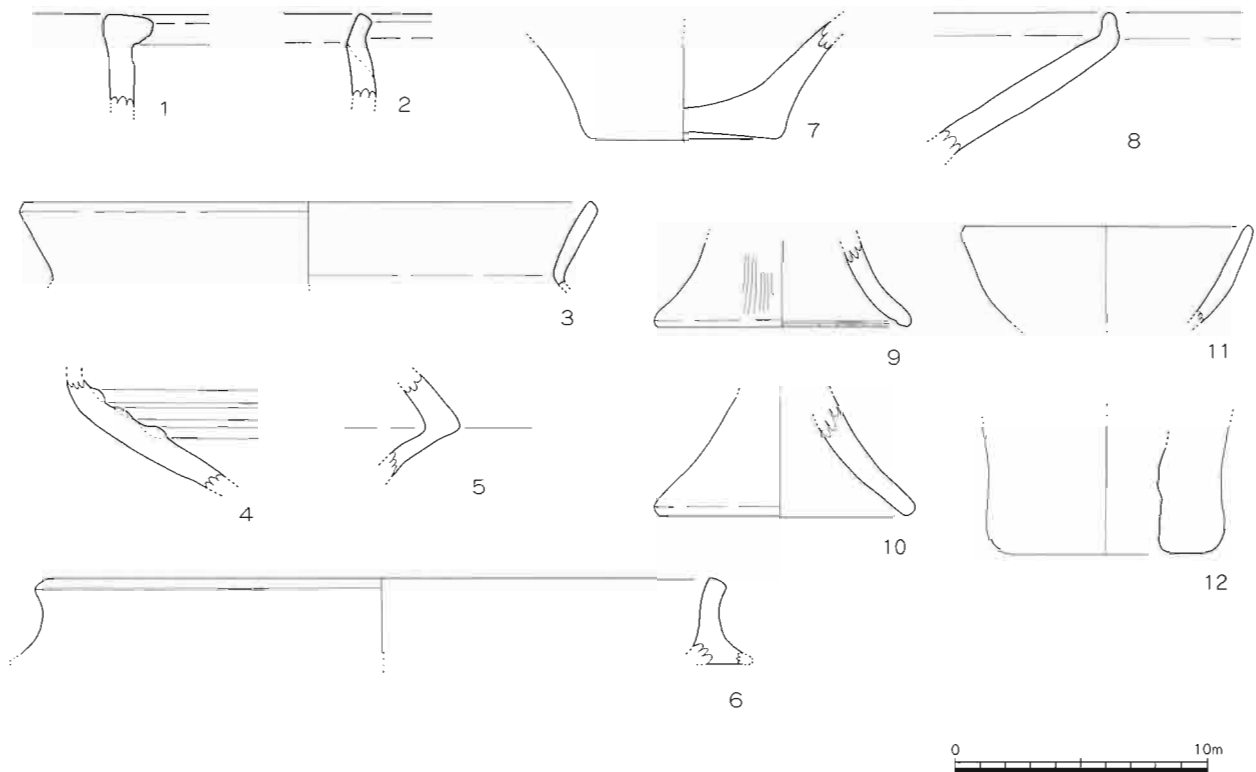
復元底径は10cmを測る。10の色調は内外面ともが明褐色で、胎土は石英、白色粒子、長石を含む。復元底径は9.9cmを測る。

11は碗であろうか。色調は内外面とも明褐色で、胎土は石英、角閃石、赤色粒子を含む。復元口径は11.2cmを測る。

12は器台である。厚みがあり、復元底径は14.1cmを測る。色調は外面が明褐色、内面が灰褐色で、胎土は石英、白色粒子、長石を含む。



第5図 1号土坑実測図 (1/30)

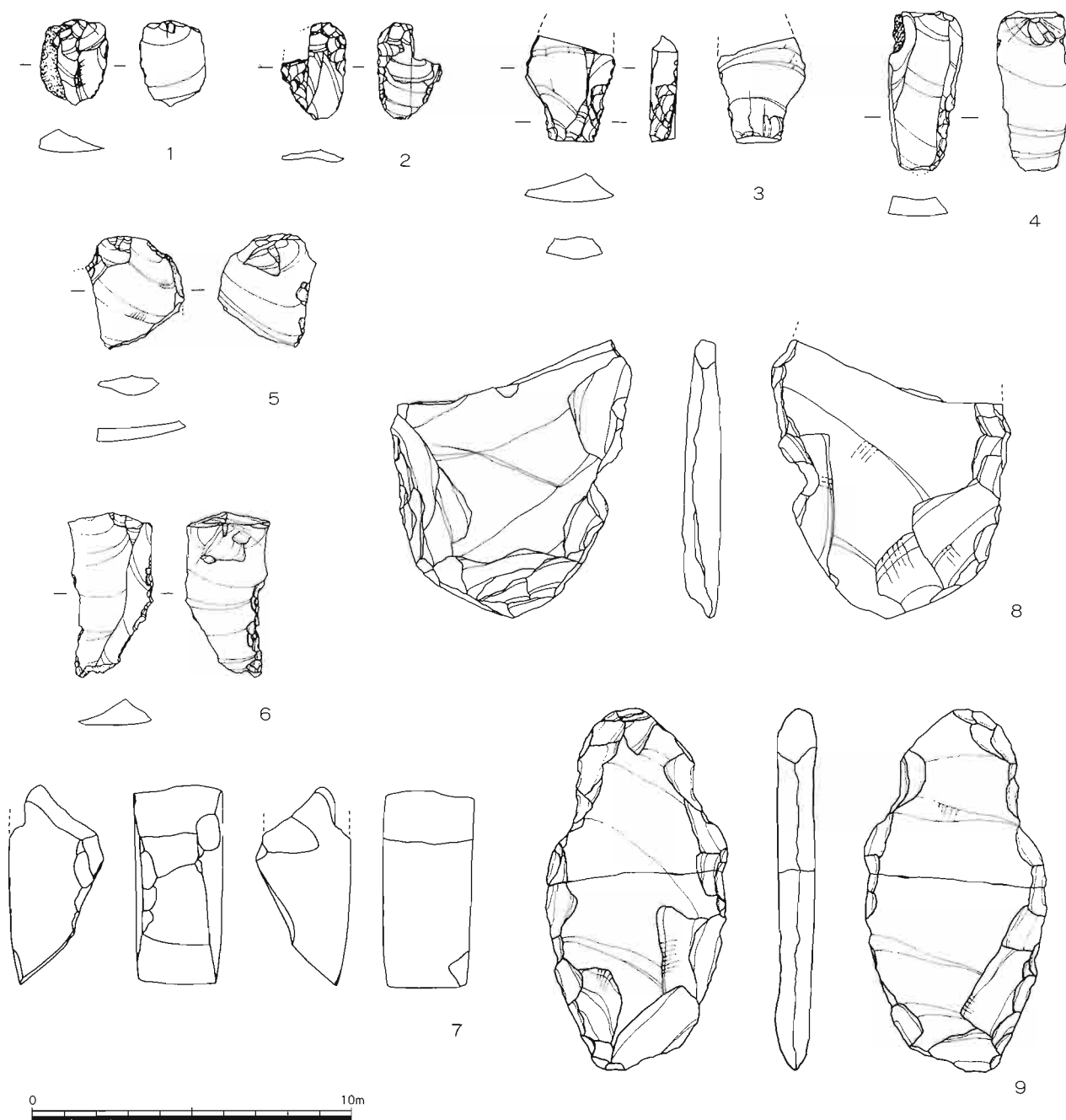


第6図 出土土器実測図 (1/3)

石器 (第8図、図版3)

1は縦長の剥片である。ネガ面には自然面が残っている。最大長2.7cm、最大幅2.1cm、最大厚6mmを測る。黒曜石製。

3はナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、ブランディングは基部のネガ面にポジ面方向から丁寧に施されている。先端部から中央部にかけての半分が欠損する。現存長3.1cm、最大幅2.7cm、最大厚9mmを測る。黒曜石製。



第7図 出土石器実測図 (1/2)

4～6は二次加工剥片である。4は縦長剥片を素材とし、ネガ面の右側辺部にポジ面方向からの丁寧な加工が施されている。一部自然面を残す。最大長4.9cm、最大幅2.3cm、最大厚9mmを測る。黒曜石製。5は不定形な剥片を素材とし、ネガ面の打面付近に加工を施す。ネガ面に自然面を残す。欠損品である。現存長3.5cm、現存幅2.9cm、最大厚6mmを測る。黒曜石製。6は「ノ」字状の剥片を素材とし、両面の一側辺にそれぞれ加工が施されている。最大長5cm、最大幅2.5cm、最大厚9mmを測る。黒曜石製。

7は挟入状片刃石斧である。基部は欠損する。磨耗が著しい。現存長5.2cm、現存幅2.8cm、現存厚2.8cmを測る。安山岩製。

8・9は打製石斧である。8はその半分が欠損する。現存長7.4cm、最大幅7.2cm、最大厚1.3cmを測る。安山岩製。9は完形品で、基部は凸状をなす。最大長11.3cm、最大幅5.6cm、最大厚1.1cmを測る。安山岩製。

IV まとめ

今回の調査では隣接するB地点^{注1)}において、弥生時代後期中頃から後半の環濠集落の一部である大規模な溝（条溝）や掘立柱建物、さらには円面硯を伴うと考えられる古代の掘立柱建物群が確認されており、D地点はそれらの続きにあたることから関連する遺構の存在を想定したが、遺構面の削平がひどく検出することは出来なかった。ただし、一括遺物には当該期に相当する弥生時代後期の土器や図示はしていないが須恵器の破片などの遺物が出土していることから、本来はそれらに付随する遺構が存在したものと推定される。

さて、発掘調査での所見を簡単にまとめると、検出した遺構の時期であるが、1号竪穴住居跡については遺構の残りが良くないこともあり時期を決定できるような遺物が出土しておらず、その年代ははっきりしない。しかし、これまでの日田市内での発掘調査例を見る限り、一部の例を除けば^{注2)}円形プランの竪穴住居跡は弥生時代中期末から後期初め頃を境にその後は方形プランへと変化する過程が見受けられる。この傾向は北部九州での在り方と符合している。さらに、調査での一括遺物の土器と照らし合わせた場合、前期まで遡る資料がないことから、この竪穴住居跡は少なくとも中期の範疇でおさまるものと考えられる。また、1号土坑についてもやはり遺物の量が少なく判断がつかず、1号竪穴住居跡と同じか後期頃の所産と考えておきたい。

このほか、発掘調査では第7図1、3～6に示すナイフ形石器や二次加工剥片などの旧石器資料が出土している。すでに、B地点においてもナイフ形石器などの旧石器がまとまって出土しているが、遺跡の他の地点では出土例がなく、遺跡内でもこのB・D地点周辺の高所にその分布の中心があるものと予想される。旧石器時代の石器は市内では表採例は多くあるが、一つの遺跡の発掘調査で出土することは珍しく、今後この地域でのこの時代の様相を考える意味では貴重な資料と成り得るであろう。

註1) 土居和幸 「三和教田遺跡B地点」『平成6年度日田市埋蔵文化財発掘調査年報』日田市教育委員会 1996年

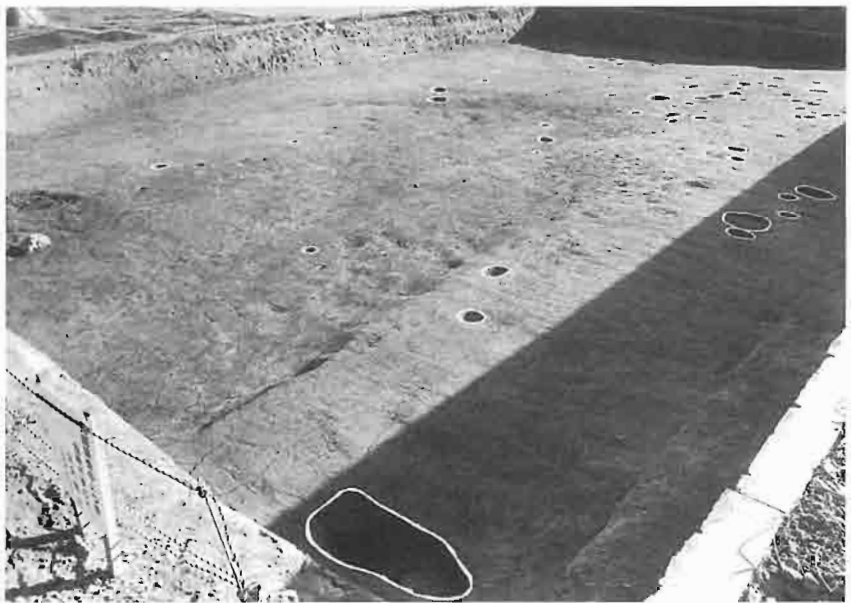
註2) 市内西部の祇園原遺跡では後期前半代の円形プランから方形プランへの移行期の竪穴住居跡群が調査されている。行時志郎編『塚ヶ原遺跡群』日田市教育委員会 1999年

〔図版1〕

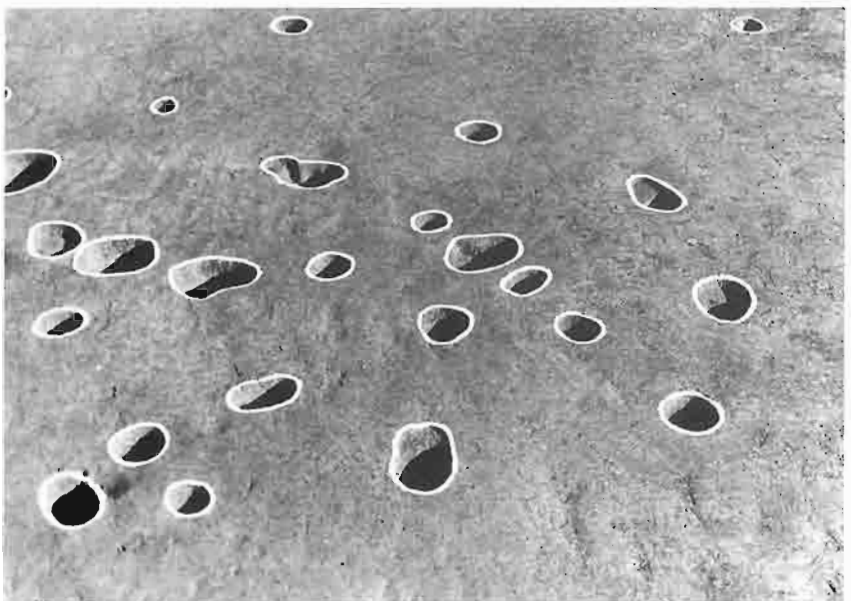
調査風景

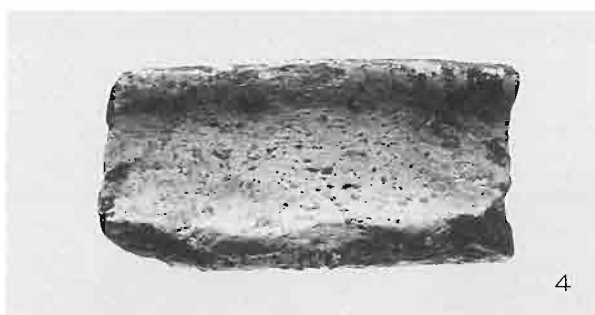
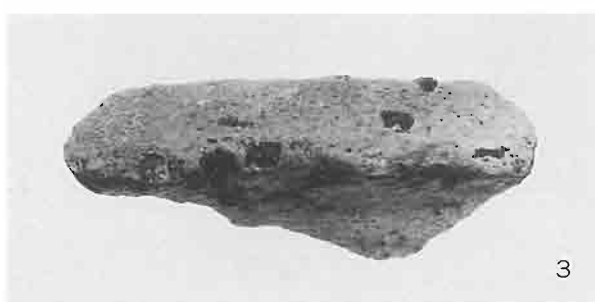


発掘状況（手前は1号土坑）

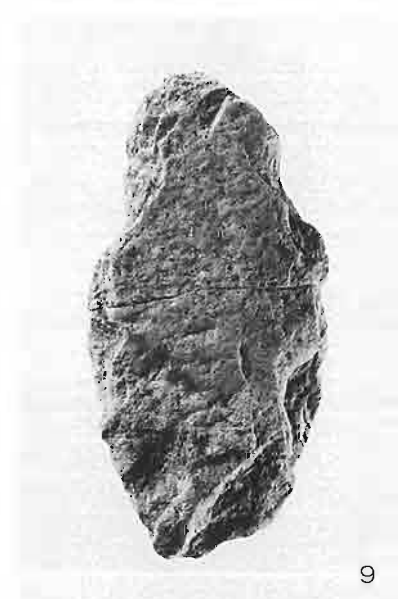


1号竪穴住居跡発掘状況





〔图版3〕



報告書抄録

ふりがな	みわきょうだいせき (でいちてん)
書名	三和教田遺跡D地点
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第24集
編著者名	土居 和幸
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2000年6月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三和教田遺跡 D地点	大分県日田市大字 三和字點町	44204-6		33度 分	130度 分	19981212 ~ 19981223	560㎡	住宅造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三和教田遺跡 D地点	集落跡	旧石器時代		ナイフ形石器、二次加工 剥片	一括遺物
		弥生時代	竪穴住居跡、土壇、柱穴	弥生土器、石器	

三和教田遺跡D地点

日田市埋蔵文化財調査報告書第24集

平成12年6月30日

発行 日田市教育委員会
大分県日田市田島2丁目6-1

印刷 尾花印刷有限公司
大分県日田市田島本町8-8

